

10 箴言「獅膽鷹目女手」の日本への伝播とその漢訳者

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科

千葉医学専門学校外科教授の三輪徳寛（よしひろ、1859-1933）は外科医の心得として「獅膽鷹目行以女手」を主唱して学生、医師を教育した。三輪はヨーロッパ留学中、彼地の手術室に若手の医師、医学生に教訓とすべき格言が掲げられているのをしばしば見て強い関心を寄せた。帰国後、彼は手術室に掲げるべき標語を模索していたが、偶々表題の箴言を知人から教えられてそれを書家に揮毫して貰い手術室の壁書とした。格言は三輪の門人や他学の外科教授に伝えられて流布し、現在ではこの格言がデザイン化されて千葉大学大学院・医学部のロゴマークとしても使われている。以来この格言の出典やその情報の日本への伝播などを巡って諸家によって種々研究されてきたが、明確な見解が得られなかった。

演者は日本麻酔科学史を研究してきたが、三輪が太平洋戦争以前の日本で最も詳細な麻酔科学の教科書を執筆し、わが国で最初の局所麻酔の著書を上梓していることから彼の業績に注目し、この金言に関しても研究を続けてきたが、今回この格言の日本への伝播の時期を特定することが出来、その漢訳の候補者を高い蓋然性をもって推定できたので報告する。

イギリスの外科医 John Halle はフランスの外科医 Lanfranc の *Chirurgia Parva* (1295) を 1565 年に英訳出版した。訳者序の中に次の言葉がある。“a chirurgien should haue three dyuers properties in his person. That is to saie, a harte as the harte of a lyo, his eyes lyke the eyes of an hawke, and his handes as the handes of a woman.”これが箴言「獅膽鷹目女手」の英語の原文である。

この金言がオランダに伝えられて 1853 年から出版された Harrebomée の俚諺辞典に収載された。彼は 1777 年の金言集の写本からこの言葉を採取した。つまりイギリスからオランダへは 1565 年から 1777 年の間に伝えられたことになる。オランダ語文は以下の通りで英語の原文から大分改められて訳されている。“Een valken-oog, een leeuwen-hart en eene jufferhand is den medicijnmeester noodig.”

三輪は箴言の漢訳がシーボルトの弟子の蘭学者によるものと推定しているが、演者のこれまでの調査によれば、当時の外科を中心とする翻訳書やその他の翻訳書中にこの格言の痕跡を見出すことは出来なかった。つまりこの箴言が医学書によってわが国に伝播されたのではなく、他分野の書籍によって将来されたと推察される。1853-7 年出版の Harrebomée による俚諺辞典の第 1-7 分冊、3 セットが 1858 年に本邦に舶載されて著書調所が購入した。その中の 2 セット（各セットは製本されて 1 巻となっている）が静岡県立図書館の葵文庫に所蔵されている。1 巻は A から JUOOR までを俗諺を収めており、277 頁の Hand と 287 頁の Hart の項の各 Een の条にこの格言が披見される。すなわちこの格言は 1858 年に日本に伝えられたことが明らかになった。

Harrebomée の俚諺辞典が著書調所に購入されていることから、訳者は同所でオランダ語の教授、翻訳に携わった人たちの中にある可能性がある。しかもこの金言は外科に関連した言葉であることを考慮すると、20 数名知られているその関係者の中で、臨床の医学者でかつ外科に関心を有し、漢学の実力を持っていた人物は限定される。箕作阮甫、杉田成卿、坪井信良の三人である。杉田は辞典の輸入後間もなく病没しているから、箕作阮甫と坪井信良、特に後者が訳者の有力な候補者と考えられる。この金言が明治時代の前半にイギリスあるいはドイツから伝えられて翻訳された可能性は、「鷹」の訳語と「獅膽」、「鷹目」、「女手」の語順の関係などから低いと考えられる。